

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月26日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520665

研究課題名（和文） 平安京の「居住と空間」分析

研究課題名（英文） The analysis of 'housing and space' in the Heian Capital

研究代表者

西山 良平 (NISHIYAMA RYOHEI)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：30135503

研究成果の概要（和文）：本研究「平安京の「居住と空間」分析」の目的は、平安京・中世京都の個別の居住・住宅と、個々の居住・住宅の集合または分散、すなわち都市内部の一定の地域・空間の個性を、日本史・建築史・考古学などの諸分野が連携し、究明することである。すなわち、個々の居住・住宅と都市内部の地域の両者を統一的に分析することで、都市の全体構造を解明する。

研究成果の概要（英文）：The objective of the present research project “The analysis of ‘housing and space’ in the Heian Capital” is to shed light on the specific features of particular urban areas and living spaces in the Heian Capital and medieval Kyoto by investigating individual dwelling houses or residences and the nature of their collectivity or dispersion from the collaborative perspective of history, architectural history, and archeology. By the comprehensive analysis of individual houses or residences and their relationship to urban areas, the present research project aims to clarify the total urban structure of the city.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：平安京・都市・空間・居住・住宅・右京・左京・上京

1. 研究開始当初の背景

(1) 平安京の社会構造の基礎的な要素は、個々の居住と住宅である。西山は、文献史料

から一般住人や貴族の居住と住宅（家）を分析した（西山良平『都市平安京』2004年）。文献史料からは居住の分析が中心で、住宅の

あり方は建築史の専門分野であり、その分野の研究に多くを学んだ。

(2) その過程で、平安京から検出される遺構には、従来の通説・定説を一新する事実があり、文献史料だけでなく、建築史・考古学などとの緊密な交流が必要と考えた。代表的な成果には、第一に、一般住人（庶民）の住宅すなわち町屋の成立を 11 世紀前後に明確に認定できたことがある（西山良平・藤田勝也編著『平安京の住まい』2007 年）。第二に、寝殿造などの貴族の住宅は典型的な寝殿造（太田静六『寝殿造の研究』1987 年）とは相違し、園池は邸宅の南半に配置されるとは限らず、また想定以上に面積が広い。邸宅全体の中では園池を優先し、寝殿・対の位置は園池に規制される。にもかかわらず寝殿・対の配置はつねに一定である、などがある（西山良平・藤田勝也編著『平安京と貴族の住まい』2012 年）。

(3) この研究の中で、個々の居住と住宅の検討から、都市全体のあり方を検証する必要性が発生した。すなわち、居住・住宅の側面でお未解明の事実があるが、その究明と同時に、個々の居住と住宅の集合または分散の形態を分析し、両者を総合することで、一層の研究が前進すると考えられる。後者の平安京の空間構成の観点はあまり意識されないが、取り組む価値がある。そこで、個々の一般住人の居住・住宅から都市の空間構成まで、その各々と、両者を統一的に分析・検討する。

2. 研究の目的

(1) 個々の居住・住宅と、その集合または分散である空間構成は表裏一体であり、両者の分析から始めて個々の居住も空間構成も十分な解明が可能である。

(2) 個々の一般住人の居住・住宅では、町屋（小屋）の成立論を「居住と空間」の観点から推し進める。町屋の成立の背景を平安京の空間構成の中で検討する。町屋の初見である右京七条二坊十二町の遺構は右京に位置する。一般に右京は 9～10 世紀に衰退するにもかかわらず、この地点では 10 世紀中頃から 13 世紀まで、町屋が継続・発展する。その理由は、この地点が西七条と呼ばれ、平安京から七条大路を通り、西郊に往来する交通の要衝であるからと考えられる。西七条とその周辺では、多くの地点が発掘され、その広がりや時期的な変遷を考えることが可能である。文献史料も伝来し、以上の観点から、町屋の集合（空間構成）を分析する。

(3) 西七条と同様に、平安京では 11～12 世紀に、個々の地点に固有の空間的特色が発生する。たとえば、織部町の織手、七条・町の細工、六角・町の魚商人、清水坂の乞食などである。これらは個々の居住の集合で、中世京都に継承されるが、その集合が各地点の空間的特色を形成する。左京七条・八条では、七条町や細工を中心に文献史料や発掘データが豊富であり、さらにその南側に八条院御所・院領と近臣集団の邸宅などが所在する。この地区では、最近、左京八条三坊四・五町から貴族邸宅に相当する大規模な建物遺構などが発見され、その空間構成の前史や変遷を分析する。

(4) (2) (3) と同じく、院政期前後の権門貴族や院・女院の御所を中心とする街区の再開発を検討する。従来は鳥羽・白河・法住寺殿が著名であるが、西園寺公経と一条北辺の持明院大路や五辻など、すなわち上京がその事例である。院政期以降の開発・再開発は院などが中心であるが、一般住人の動向と不可分である。

あり、両者の関連を考察する。

(5)「居住と空間」の観点を東アジアに視野を広げ、まず中国と比較する。日本古代の都城では町の内部は戸主に細分されるが、これは日本独自の制度とされる。また、中国では一般住人の都市住宅などは廬舎などと表記され、小屋は中国・朝鮮では使用されないと仄聞する。撰関期の小屋（町屋）の発生の東アジア的意義を考察する。

(6)貴族の邸第の貸借・融通関係を分析する。平安京の貴族の居住形態は所有と居住を区別しにくく、権大納言藤原行成など貴族は自身もしくは他者の邸宅を数多く使用・居住する。伊勢齋宮や賀茂齋院の京内御所も「人の家を借る」すなわち貴族の邸宅を借用する。貴族の居住形態を邸宅の貸借の観点から考察する。

3. 研究の方法

(1)藤原京・平城京など古代都城の研究は各地で盛んであるが、10世紀以降の平安京を正面から精緻に取り上げるプロジェクトはユニークである。

(2)居住と空間の視角は斬新なもので、研究の発展が期待される。撰関期に平安京は古代都城の政治的に均等な空間構成を脱却し、院政期や中世京都に固有の空間構成に多分に分節・傾斜すると予想する。

(3)平安京研究は文献史料と発掘事例がともに豊富であり、両者に通暁する必要があるが、本課題のスタッフは日本史・建築史・考古学の代表的研究者であり、適任である。また、文献・建築・考古学などの分野で協力者を得やすい環境にある。

(4)平安京などの一般住人の居住と住宅を東アジア的視野から分析する研究は皆無に近く、その進展が切望される。

(5)鎌倉などの都市と比較・検討し、情報・成果を交換する。

(6)年に2・3度の公開研究会を開催し、全国に参加を募り、意見を交換し、成果を発信する。

4. 研究成果

(1)個々の居住・住宅と、その集合または分散である空間を幅広く検討することができた。(2)(3)(4)は主に居住・住宅の集合（または分散）、(5)(6)は主として個々の居住・住宅の分析である。(5)や(6)で未着手のテーマがあり、今後の課題となったが、(6)では当初の予想を超える成果を得ることができた。平安京が撰関期に地域（居住・住宅の集合）に分節され、中世京都に継承される過程が判明した。

(2)西七条など右京南部地域の問題では、発掘成果と文献の両面から検証した。文献では左京七条と対比しつつ、西七条と松尾祭の相関関係が強調され、発掘からは右京南部を六条ブロックと七条ブロックに分け、七条ブロックの継続性が確認された。

(3)平安京左京南部（八条・九条）の街区形成を考察し、平安後期に遺構が増加し、室町時代に急速に消滅すること、鑄造遺構・遺物は八条二坊東端から三坊西半（梅小路以北）に集中することが判明した。

(4)中世の上京地区を多面的に考察した。上京地区は、近年、同志社大学今出川校地・烏丸校地などで大小の発掘が相次ぎ、重要な遺

一タが得られた。それらの一定の成果がまとまりつつあり、その内容を討議した。今後は上京地区全体を対象を広げ、院や貴族と住人の相互関係から、平安京の一条以北の開発を分析する予定である。また、鎌倉時代の西園寺家の邸宅の変遷を解明する作業を行った。西園寺家は上京地区の繁栄の中心である。

(5) 中国の庶民住宅は、『新唐書』(1060年)を皮切りに、廬舎などから民廬・民居など用語の種類が増加する。日本の小屋はわずか4件だけで、小屋の個性が際立つ。また、中国と日本の都城の居住と住宅の様態を比較・分析するため、中国都城の条坊制の宅地を検証する予定で、協力者に報告を依頼し、快諾を得た。しかし、残念ながら、協力者が逝去され、果たすことができなかった。

(6) 貴族の邸宅は当初の課題を超える成果を得た。

① 貴族の邸宅・家の自律性もしくは非自律性を、院政期に焦点をあて、院権力と邸宅＝家の裁判権の側面から検討した。

② 新たな事態として、平安京右京三条一坊六町の調査が進行し、六町が右大臣藤原良相の西三条第と確定した。〈居住と住宅〉の観点から、西三条第の東北の池から出土の墨書土器を検討し、西三条第の家政や文化の様態を解明した。

③ 平安京右京二条二坊八町の貴族邸第に相応しい園池、王朝物語と居住空間の関係、『拾芥抄』『西京図』の右京三条三坊五町の「栖霞寺領」と出土の良質の緑釉陶器の関係を検討した。

④ 平安京の住宅と対照するために、平安宮の官衙の建築や圍繞施設(築地など)、また大極殿・豊楽殿・武徳殿の殿上のあり方に検討を加えた。

⑤ 貴族邸宅の貸借・融通関係は未着手である。

(7) 中世都市鎌倉を取り上げ、平安京の町屋(小屋)との比較研究のために、中世鎌倉の「町屋」の史料とその分布形態を検証した。また、平泉では平安後期の大型建物が多く出土する。大型建物などの事例を詳細に報告していただき、平安京の建物遺構と比較分析を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

- ① 鈴木久男、発掘調査から見えてきた鳥羽離宮、京都歴史散策マップ、査読無、2、2012、9-16
- ② 鈴木久男、考古学からみた西園寺北山殿、中世文学、査読無、58、2013、印刷中
- ③ 藤田勝也、近世近衛家の屋敷について、日本建築学会計画系論文集、査読有、675、2012、1193-1200
- ④ 藤田勝也、近世鷹司家の屋敷について、日本建築学会計画系論文集、査読有、684、2013、475-483
- ⑤ 鈴木久男、発掘された鎌倉時代の京都の庭園、鎌倉時代の庭園 京と東国、査読無、2012、8-15
- ⑥ 鈴木久男、平安京右京六条一坊六町の仏堂とその宅地、季刊 古代文化、査読有、62巻4号、2011、104-110
- ⑦ 鈴木久男、発掘遺構から見た平安時代庭園、平安時代庭園の研究(奈良文化財研究所学報)、査読無、86冊、2011、42-51

[学会発表](計4件)

- ① 鈴木久男、考古学からみた西園寺北山殿と下鴨神社境内水辺の祭祀跡、中世文学学会秋季大会、2012年10月27日、京都市・京都産業大学
- ② 西山良平、『方丈記』の京都と災害、「古典の日」記念事業 古典の祭典 2012、2012年11月1日、京都市・京都アスニー
- ③ 西山良平、平安京と町・戸主の編制、第39回古代史サマー・セミナー、2011年8月20日、京都市・お宿いしちょう
- ④ Masaya Fujita、Rethinking the history of housing in Japan, researching

historical architecture 、 Japan
Research Centre Seminars for Term 3、
19May2010、Russell Square Campus, SOAS ,
University of London, UK

[図書] (計3件)

- ① 西山良平・藤田勝也編著、京都大学学術出版会、平安京と貴族の住まい、2012、380
- ② 鈴木久男、鹿苑寺境内不動堂石室調査委員会、鹿苑寺境内不動堂石室調査報告書、2011、23
- ③ 西山良平・鈴木久男編著、吉川弘文館、恒久の都 平安京 (古代の都3)、2010、289

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西山 良平 (NISHIYAMA RYOHEI)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：30135503

(2) 研究分担者

鈴木 久男 (SUZUKI HISAO)
京都産業大学・文化学部・教授
研究者番号：50460671
藤田 勝也 (HUZITA MASAYA)
関西大学・環境都市工学部・教授
研究者番号：80202290